

いろ犯罪に走る子どもたちも多くなってきました。動物はなぜ大事なんだろうということを今話さなくてはならない理由は、社会が変わったからだと思います。

そのようなことで、私たちもそういったことにご協力することを本当に今までは積極的でなかったと思います。今、桑原先生をはじめこうしたことを立ち上げてくださった先生方がよりよい議論を進めて、きっといい確立した基準をつくっていただけたらと思っております。

<鳩貝>

時間がなくて申し訳ございません。5時には閉じなければならぬものですから、申し訳ございませんがこの辺で、まだまだご意見等たくさんあるかと思えます。やっと白熱してきたところでもあるわけですが、先ほどお渡しいたしましたペーパーの方にその辺お書きいただいて、われわれのところでは対応できる部分については、対応するし、また今後の会の運営をしていく上で、みなさんのご意見を参考にさせていただきたいと思えますので、ご遠慮なくいろいろ書いていただければと思います。

ここで、総合討論の方のまとめということにはなりません、閉じさせていただきたいと思えます。

これで、この研究会がやっと歩き出すことになるわけですが、みなさんの様々なご意見をいただきながら、活動できたらと思っております。

この場でいろいろ発表していただきましたパネラーの先生方、どうもありがとうございます。

【講評】日置光久 国立教育政策研究所教育課程調査官

<鳩貝>

このシンポジウムの締めくくりとして、文部科学省 日置先生より講評をお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。

<日置>

みなさんこんにちは。

もう終わって、帰ろうとされた方もいらっしゃるようですが、ここで少しだけ、10分ちょっとお話をさせていただければと思います。

私、文部科学省の教科調査官ということもありまして、ここには、たぶん教員の先生方と獣医師の先生方、それから動物園の方もおられたようですが、いろいろな職種の方々がいろいろな意見をもって、新しくできたこの研究会にいろいろな可能性と思いをたぶんおもちだと思えます。これからどんどん発展していけばいいと思っております。私は、文部科学省ということもあって、教育

ということで、少しだけ、特に学校の先生方に、どんなふうに学校教育の中で考えていけばいいのか、そのことに対して何か少し参考になればということで、今日のお話を締めくくらせていただきましたと思います。

簡単に四点のことを考えていたんですが、一つは、今の教科で行われている教育、これは記号系と実物系があるわけです。記号系というのは国語とか算数、言葉とか文字とか数、これを扱うことによって子どもが学んでいく教科です。もう一つは実物系です。あえてそういう分け方をするならば、生活科はまさに直接体験、具体的であります。理科もそうです。自然に親しむという文言が一番最初に出てきます。具体的な事物現象から始まるものです。そういった様々の教科の特性があるわけなんです、動物飼育は、どこの教科でどんなふうにするか、もちろん、総合的な学習という、今の流れがあるわけですが、いろいろな可能性があると思うので、その辺を考えていく必要があるのではないかと思います。

一般的には実物系で扱うということになるわけですが、これが総合的な学習の時間を含めて、今、体験活動、自然体験とか、法律もできて増えています。ところが、体験のバブルとかいわれて、これが、体験だけで終わってしまって、子どもの学びがないんじゃないかということをよく言われます。動物飼育がその仲間入りをされてしまっては困るわけです。そこに、学びというものを考えていっていただきたいと思えます。単なる体験ではなくて、体温のある体験、それは何かというと、われわれと同じように体温のある動物を抱っこしたり、精力的に世話をすることによって、子どもにどういう力が育つのかということです。教育的な価値です。この辺を今から考えていく部分も大きいでしょうが、その辺をしっかりと位置づけて、考えながらやっていくということだと思います。そじゃないと、たまたま学校に動物がいたから、扱わなければならない、コンピュータ買ったから何かやらなければいけない。そういうことではなくて、まず、子どもへの教育的な価値というものを、しっかりと考えていかなければならないのではないかと思います。そこは、中教審の答申にある「生きる力」に当然関連してきます。その辺を研究していく。そしてそういう願いを実現するための一つの非常に効果的な可能性のある方法として、学校における動物飼育というものを考えていくということが、基本的なスタンスなんだろうなと思えます。そのためには先ほどの動物飼育管理指導計画ですか？そういう、いろいろな指導計画をしっかりとつくっていきこうという試みが、すでに

スタートしているということは、喜ばしいことだといえると思います。これが一点です。これは、四観点の評価でも考えられますので、特に第一観点第二観点が、動物飼育に関連してくると思います。もちろん三観点四観点もありますが、その辺は先生方もうおわかりでしょうから。

それから、二つ目。これは、心理学的な面から若干お話しいたします。いわゆるメンタルローテーションという言葉があります。これは、自分から見えている見え方と、こちらの人から見えている見え方は違うわけです。小学校低学年くらいの小さい子どもですと、自分から見えているように他人からも見えていると思うわけです。相手の立場に立ちにくい、ということがあります。ピアジェがいうように発達段階でくっきり切れるわけではありませんが、そういうメンタルローテーションの一つの研究がされております。学校における飼育動物というのは、認知的なメンタルローテーションもさることながら、信条の気持ち、思いやりのメンタルローテーション能力を育成することにも、私はずいぶん可能性があるのではないかなというふうに聞かせてもらいました。その辺がポイントになってくると思います。要するに相手のチャボとかウサギが、自分に何をしてほしいんだろう。自分が好きな食べ物とチャボが好きな食べ物は違うはずなんです。自分はこれが好きなんだけれども、でも... というふうに、相手の立場に立つ力、これを、動物の行動とか日々継続観察し、飼育舎の様子とか体調とか、その辺から一種の推測して、行動して、その結果がどうかということをもたまた自分にフィードバックしていくこと。これはすごく大事な新しい学力の一つになると思います。これが二点目です。

それから三つ目です。これは、物的関係として子どもと動物ということ。動物介在教育というくらいですから、子どもがいて動物がいるわけです。子どもと動物に関係して、リレーションがあるわけです。この関係性によって、一つの教育が行われる。そうですね。だから、動物をかわいいなとか、思いやりも育つでしょうね。これは二項関係なんです。そういう教育の可能性もあるんですが、もう一つの可能性も考えてほしい。それがなにかというと、動物を介在して子どもと子どもが話し合うということです。共感し合うということです。これは三項関係の教育です。動物を介在した三項関係の教育。僕は動物飼育をしてこういう体験をもっている。同じように友だちももっている。そういう点が共通なんです。でも、自分の受け止め方や感覚とか、価値観が違うから、違う見方になるんです。そこで話し合うことによ

って、変わってくるものがあるんです。だから、二項関係の教育の価値もあるし、三項関係の教育の価値もあると思うんです。そうなってくると、動物介在教育ではあるんですが、もっと言うならば、人間交流プログラムになってくるわけです。われわれ人間というものが、お互いそういう生き物を飼育し合うことによって、集団としての学び合いがある。知をつくっていく、学びを深めていくという可能性はあるんじゃないかなというふうに思いました。さっき、学校で他の子どもの目を意識するけれども、家に帰ったら自分と二項関係だから、まさにねこっかわいがりするわけですが、それはそれでいいんだけど、学校で他の子どもの目を意識する、これは、すごく大事なですね。自分はこうしたいけど、たぶん友だちはこう思うだろう。一種のメンタルローテーションですね。その中で、自分は妥当な行動を決定していく。そのフィードバックを自分で結果責任を考えていく。こういうことですよ。これが学校で、しかも集団で飼育することの新しい価値なんじゃないかと思います。非常に短くて申し訳ないです。

そして、四点目は、心情的なこと。思いやりだとか、そういうことがよく出てくるんです。動物飼育の場合。理科でも3年生で昆虫を勉強しますが、これは、自然を愛する信条、昆虫に対する愛情ということをやります。それはもちろん大前提なんだけれども、もう一つあると思うんです。それは先ほど森田実践でもありましたが、モルモットが500gから1kgまで体重が増えてしまった。短い時間に。これはダイエットさせなくてはいけないという、切実な子どもの思いやりがあるわけです。そのためにどうしようかと、自分たちがダイエットするときのことを考えるわけです。当然ながら、で、やってみるとの原に連れて行けば、草ばかり食べて全然動かない。これはだめだ。ということになるわけです。それじゃどうすればいいのか。必要に迫られて問題解決してくんです。考えるわけです。これは、信条系のことだけではなくて、認知的な能力です。まさに、確かな学力を担う力になってくる。だから、そういう信条系の力を育成しながら、同時にそういう問題解決の力も育成できるんだと思います。たぶんそれは、簡単に離れない。両方向が合わさっているんだと思います。そこを先生方が特に意識して、指導計画をつくる。改善案をつくる。これがポイントになっていくのではないかと思います。多くは総合的な学習の時間で扱うと思いますが、そこに自ら課題を見つける、自ら学び自ら考える。ということです。これはまさに、問題解決の能力を総合的な学習の時間で育成しろということ

す。そのためにコンテンツフリーだという話ですから。飼育動物という非常に豊かな可能性を持った題材、テーマをもってきて、それで問題解決の能力を育成する。これもできるんですね。しかも命がもっているそういう信条、こういうものが溢れるように出てくる。それと一緒にしながらできる。これが新しい価値。これが四点目です。

以上、たいへん短いですが、私自身考えた可能性ですね。これからの教育で学校でそういうチャボやウサギを持ち込んだ場合の、単に持ち込めばいいのではないんです。それでは単なる体験になってしまうんです。そうではなくて、学校教育での価値をこれから研究していく。これは素晴らしいことだと思います。

<鳩貝>

どうもありがとうございました。

最初にお断りしましたけれども、主任視学官の嶋野先生が台風の関係で今日来られないということだったんですが、台風が二転三転いたしまして、突然、今お見えになりましたので、嶋野先生にもちょっとご挨拶お願いしたいと思います。

文部科学省主任視学官の嶋野先生です。

<嶋野>

たいへんお騒がせをしました。鹿児島に行く予定だったんですけれども、飛行機が欠航になりまして、向こうの明日の会も中止になりまして、そんなことを考えながら家に帰るのもいいんですけど、やはり、ここに来てしまいました。

それで、私は今こう考えています。私は今、どうしてここにいるんだろうと思っているんです。それは、時間がありませんので簡単に申し上げますが、やはりここに新しい可能性と魅力を感じているからです。いままでのこういう研究会とかこういう集まりというのは、どちらかというと、少し語弊があるかもしれませんが、なにがだめだあれがだめだというマイナス面を指摘して、問題解決を図るという傾向が強かったと思います。

しかし、それではどうもげんかひがある。そして、あまり強くなれば排他的になってきます。進みません。もう、これからの時代というのは、それぞれの立場で、今自分は何ができるのかということ、それぞれが考えていく時代になったんじゃないか。私は今、文科省の中で仕事をしてますから、私の立場で、あるいはまた獣医師さんの立場で、また、指導主事さんもうらっしゃるし、

学校で授業をやっている方もいらっしゃるし、保護者の方もいらっしゃる。それぞれ、いろんな立場の人たちが全国各地から集まってきている。私の期待通りだったと思って、すごく興奮をしています。そういう時代づくりに乗って、子どもにとっての未来。また、子どもの周りから動物がいない社会をつくってはいけないということが、僕の信念でありまして、そういう社会にしないためにも、みなさんと一緒に学びたいし、やれることをやっていきたい。そういう思いを強くして、今、ここにおります。どうぞみなさん、一緒にこの研究会を盛り立てていこうではありませんか。お願いします。

<鳩貝>

どうもありがとうございました。文部科学省から強い激励をいただいたと、私どもは考えていきたいというふうに考えております。

先ほどちょっとございましたけれど、こういう飼育のことも含めた心の教育の問題に、文科省も力を入れて、来年度の概算要求をしているというお話もあります。私どもが、今日、こういう形で集まりまして、学校飼育動物を通して教育の問題を考えていこうということで、研究会が発足いたしました。

雨の中、また、西の方では台風がだいぶひどくなってきているということですが、全国各地からお集まりいただきまして、本当にありがとうございました。

私ども、今日選出されました会長以下、運営委員も含めまして、みなさん方の要望に少しでも応えられるようないい研究会に育てていきたいというふうに考えております。先ほどお願いしましたように、そのペーパーの中に、ご意見、どうしたらいいのかという情報も含めまして、感想も含めて書いていただければ、私どものこれからの活動の参考になると思います。

このあと1月30日には、研究発表会を予定しております。その前には、研究史を発刊いたしまして、みなさん方にお届けし、発表会までの予定も、その中に入れたいと考えておりますので、是非、これからの活動にご協力をいただければと思います。

本日は、これで、このシンポジウムを閉じさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。